

中高生の悩みの実態と教師との関係が中高生の悩みに及ぼす影響

附属中等教育学校 石橋 太加志

Influence which the relation between the actual condition of junior and senior high school students' worry and a teacher has on junior and senior high school students' worry

Takashi ISHIBASHI

(Secondary School attached to the Faculty of Education)

This research aims at investigating the actual condition of junior and senior high school students' worry. When investigated to 594 junior and senior high school students who are doing part activity, being collected into part activity, relationships with friends, and a study side turned out to be a worry. Moreover, apart from the worry, the relation between the mind, and a bodily condition and a teacher and a time view were extracted. Next, the relation with a teacher did not predict the condition of the mind and the body as a result of multiple linear regression analysis. It turned out that the relation by a teacher is adjusting the relation of a worry and the shape of a psychosomatic disease of relationships with friends. However, it was a time of the worry to relationships with friends being a low level that the "merit" of relation by a teacher adjusts, and when the worry to relationships with friends was strong, stopping having the adjustment effect understood.

目次

- 1章 問題と目的
 - A節 中高生の悩み
 - B節 中高生の悩みの実態を捉えることの意味
 - C節 悩みの支え手
 - D節 部活動をしている中高生の悩みと教師の関係
 - E節 本研究の目的
- 2章 中高生の悩みの実態調査（調査1）
- 3章 中高生の悩みの内容の検討のための調査（調査2）
- 4章 考察
 - A節 中高生の悩みの検討
 - B節 中高生の悩みと心と体の症状
 - C節 中高生の悩みと教師との関係
 - D節 今後の課題

引用文献

1章 問題と目的

中山（1992）は、「児童生徒等の問題行動を理解して対応する場合には、『水面に浮かぶ氷の原理』で説明することができる」としている。その原理とは、「表面に表れている問題行動は、水面上に出ていて目で見ることができる氷の部分に相当し、問題行動を生み出

している背景(家族関係, 生育歴, 友人関係など)は、目で見ることができない水面下の氷の部分に相当する」と述べている。背景にある要因として、子どもたちが持っている悩みがある。本研究では、中高生の悩みの実態を調べることを目的とする。

A節 中高生の悩み

人は、「悩み」をもつ存在である（岩井,1983）。中高生も、悩みをもつ。中高生の悩みは、次のような意味をもつと考えられてきている。

1項 人としての反省（パスカル流にいうパンセ）としての悩み

この発想によれば、悩みは決して負の意味をもつわけではない。アイデンティティや生き方、将来展望などとの関連が想定される（岩井, 1983）し、心の成長にもつながる（尾藤, 2008; 小田, 2000; 杉田, 2007）と考えられるから。

2項 悩みは不適応症状の一步手前の潜在的状態を表す（中山, 1992）

この立場によれば、悩みは後のいろいろな不適応を予測する（神保, 1985; 長尾, 2002; 小保方・無藤, 2006; 岡安・高山, 2000; 山下, 2003;）。もし悩みの段

階で適切に支援が行われれば、不適応に陥るまえに子どもを救うことができる(安田・遠藤・下川・布施・袴田・伊藤, 2009)。

B節 中高生の悩みの実態を捉えることの意味

前節1項, 2項のどちらの立場をとるにしても, 中高生の悩みの実態を捉えることは発達心理学的に意味をもつ。しかし, どちらが妥当なのか, あるいは両方も妥当なのか実証的にわかっていない。その理由は少なくとも2つある。

1項 先行研究にみる悩みの定義と調査方法

先行研究によると, 中高生の悩みの実態はきちんと捉えられていない。悩みの定義について, 岩井(1983)は, 悩みを「単に不安や恐怖のように心理学的・生理学的な苦痛ではなく, 倫理的・哲学的な苦痛なのであり, 自らの生き方をひたすら省みながら生きる人間特有の現象」, 古屋(1993)は, 「外的な行動が阻止された状態での, ところの中の葛藤」, 小田(2000)は, 「欲求不満や葛藤の体験で, 容易に解決できない問題」, 悩みとストレスはほぼ同義(前田, 2008), 悩みの定義を明確にしない(小針, 2008), 小田(2000)は, 「個人の成長につなげることができるもの」, 杉田(2007)は, 「悩みは学びであり, 『心の成長』につながるもの」, 尾藤(2009)は, 中学生にとって, 「大人に見守られた上で悩むことは, 別の自分と出会い, 次の成長への大きなステップになっている」と報告した。また, 調査方法については, 小針(2008)が中学生にとって身近な問題であり, 悩みの原因そして相談相手を求める内容であると考えて決定したものであり, 調査した悩み5項目は子ども達から直接聞いて調べたものから抽出したものではない。また調査方法についても, 悩みの内容を子どもたちから聞き出したものではない(天野・上田・桜井・安里, 2000; 齊藤・木下・金田・森, 2010; 佐藤・山本・加藤, 1991)とする先行研究がある。

したがって先行研究には, 定義や調査方法に問題があり, 中高生の悩みを的確に捉えることができていない。そこで本研究では, 中高生がどのようなことで悩んでいるのかを自由記述してもらい, 経験的に中高生の悩みを捉える尺度を構成することを試みた。

2項 中高生の悩みの多さや深刻さと不適応症状との関係

中山(1992)の氷山モデルが検証されていない。この研究では, 基本的に中山(1992)の氷山モデルに

立って, 悩みが中高生の適応-不適応症状と関連するかどうかを検討する。氷山モデルは, 中高生の悩みの多さや深刻さと不適応症状との関係が非線型であることを暗示している。中高生の多くは, 不適応症状に至るほどではないレベルの悩みを抱えている。そして, 悩みが一定のレベルを超えると不適応症状が顕在化することになる。

C節 悩みの支え手

1項 中高生の悩みの支え手

悩みをもつとき, 人々は一人で対処するのではなく, 悩みを聞いてくれたりアドバイス・スーパーバイズしてくれたりするような他者を求める傾向がある。多くの研究は, 社会的サポートを与えてくれる人がいる・社会的サポートがある場合, 悩みがあっても不適応症状を呈しにくいことを示してきた。中高生の悩みを問題にするとき, 社会的には親がそのような役割を果たすと期待されることが多いが, 教師もそのような役割を果たすと期待されることも多い。そこで, 中高生の悩みにとって教師がどのような役割を果たしているのかを調べることも, この研究の目的とする。

2項 先行研究にみる中高生の悩みに果たす教師の役割

中高生の悩みに対して, 教師は2つの対立する役割を果たす可能性が示されてきた。

- ①教師は, ストレッサーとなり, 悩みの原因となる(藤井, 1997; 小針, 2008; 山本・仲田・小林, 2000)。もし①であるなら, 中高生の悩みに教師が含まれることになるし, 教師に関わる悩みが中高生の不適応症状をポジティブに予測するはずである(他の悩みに教師の悩みが加わると, 不適応症状はより強くなる)。
- ②教師が適切な行動をとれば, 子どもの悩みは深刻な不適応症状と結びつかない(平林・中谷, 2007; 岩瀧, 2008; 森・堀野, 1992; 安田他, 2008, 2009)。もし②であるなら, 中高生の悩みに教師は含まれないはずだし, 教師との関わりが悩みと不適応症状の関係を緩衝(制御)すると予測できる。

D節 部活動をしている中高生の悩みと教師の関係

学校生活において放課後生徒が自由に選択し活動可能である部活動は, 多くの生徒が参加し, 教育実践における部活動の重要性が指摘されている(角谷・無藤

2001)。その反面、高田・丹野・高田（1985）が、青年期における学校不適応の一つに「部活動」に起因する不適応が目立ってきていると報告し、吉村（1997）が、「部活動は生徒にとってストレスをもたらす主要な原因の一つでもあり、ストレス症状に直接影響を及ぼす原因は、部活の内容そのものよりも部内の友人関係のあり方」と報告している。部活動をしている中学生・高校生の友人関係以外の悩みについては調べられていない。さらにその悩みと教師との関係については検討されていない。

安田ら（2009）によれば、大学生に中学時代の運動部活動に関する回顧調査を行い、指導者（教師）との関係が、良好であれば、部活動におけるストレスが低減することを示した。また、安田ら（2008）によれば、大学生に高校時代の運動部活動に関する回顧調査を行い、サポートを期待している部員は、指導者（教師）から満足を得られるサポートレベルでないと、退部か、大学でも競技を続けるかの項目で有意差があった。したがって、中学と高校で分けて吟味することは意味があると考えられる。安田ら（2009）、安田ら（2008）は、回顧調査であり、直接中学生、高校生に調査したものではない。部活動において正（プラス）の面、負（マイナス）の面が報告されており、悩みを直接調査し、教師の役割を検討することは意義があると考えられる。部活動をしている中学生・高校生を研究対象とする理由である。

E 節 本研究の目的

本研究の目的は次の5つである。

- ① 中高生の悩みの実態はきちんと捉えるための尺度を構成する。
- ② その尺度の中に教師関連の悩みが含まれているか検討する。
- ③ 悩み尺度の得点が中高生の不適応症状を予測するか検討する。
- ④ 教師との関係の悩みが中高生の不適応症状を予測するか検討する。
- ⑤ 教師との関わりが、③の関係を緩衝（制御）するか検討する。

2章 中高生の悩みの実態調査

調査1：項目の収集

目的 学校内において中学生高校生の悩みの実態がどのようなものかを検討する。さらに、質問紙を作成す

るために、悩みの質問項目を中学生から抽出して作成することを目的とする。

方法

対象 都内私立男子M中学高校の中学生1年1クラス、2年1クラス、3年1クラス、高校生1年1クラス、2年1クラス、3年1クラス、計6クラス（240名）。M学校は、ほとんどの生徒が4年生大学進学希望である中学高校の一貫校で、大学付属でもある。部活動の競技レベルは、地区大会に出場する程度の競技レベルである。

手続き・倫理的配慮 調査実施前にM中学高校の調査に関して検討する会議で了承を得た。その上で、（X年1月）に「いま学校の中で不安に思ったり、悩んだり、誰かに相談にのってもらいたいと思うことは何ですか」無記名箇条書きで記述してもらった。配布回収は各クラス担任にお願いし、ホームルームの時間で実施した。

結果と考察 記述が不明確だった文章を除き、回答の文章をカード化し、同一の悩み、不安をまとめることで、32項目に分類した。分類に際して、教育心理学研究者2名と、現職教師2名（大学院生）、現職教師1名（大学院研究生）、教育心理学大学院生3名で検討した。32項目は、「学習面の悩み」、「友人関係の悩み」、「部活動の悩み」の3領域での悩みと、「教師との関係」、「心と体の症状」、進路将来に関する「時間展望」の1症状、1展望をあわせ合計6つに大きく分けられた。

自由記述の結果から、次の3点が明らかになった。

- i. 悩みは、部活動の悩み、学習面の悩み、友人関係の3因子で捉えられると考えられる。
- ii. 子どもの自由記述から、教師との関係が、悩みとは独立なものとして抽出された。
- iii. 将来展望（時間展望）に関わるものと心身の症状に関わるものが抽出された。

この結果にもとづいて、尺度を構成し、因子分析で悩みに関わる3因子と教師との関係、将来展望、心身症状の3因子を確定させた。それぞれの悩みや関係、症状、展望について32項目（4～6個の質問項目を設定）の質問紙を作成した。各項目への回答形式は5件法（「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」まで）とした。

前記 i から1章E節の目的①が明らかになった。前記 ii から1章E節の目的②が明らかとなった。

3章 中高生の悩みの内容の検討のための調査

調査 2

目的 調査 2 では、調査 1 で作成された質問紙を用いて、中学生と高校生の悩みの内容を明らかにすること、その悩みが中高生の不適応症状を予測するかを検討する、教師との関係が不適応症状を予測するかどうかを検討することを目的とする。

方法

対象 都内の私立の中高一貫校である男子 M 中学・高校の部活動に入部している生徒を対象とする。

手続き・倫理的配慮 調査に関しては、M 中学高校の検討会議で以下の手続きに従うことで了承された。無記名での実施と、配布回収方法、結果の報告である。調査 1 で中高生から抽出した質問項目から作成した質問紙にフェイスシートをつけ、学年と部活動に入部しているかしていないかをチェックする欄を設けた。(X 年 11 月) に、中学 1 年生から高校 3 年生までの各学級

全員に対して実施された。配布回収は各学級担任にお願いし、ホームルームの時間で実施された。統計解析ソフトは、SPSS17.0 for Windows (SPSS 東京) を使用した。

結果

因子分析

回収された質問紙のフェイスシートで、部活動に入部していると回答した生徒は、604 名 (中学生 296 名、高校生 308 名) であった。この生徒に対して、質問紙の質問項目全 32 項目について因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。3 領域の悩み (学習面、友人関係、部活動) では、固有値 1 以上で、5 因子から 3 因子まで分析を行い、固有値の落差、因子の解釈の可能性を考慮して、4 因子を抽出した (Table 1)。第 1 因子は、'やる気 (意欲) がでない、つまらない' などの 4 項目からなり、部活の活動上の悩みであることから「部活動の悩み」の因子と命名した。第 2 因子は、'授業の進み方がはやすぎると感じる' などの 7 項目からなり、学習面の領域以外に、部活動 2 の「部

Table 1 学習面、友人関係、部活動の悩み 3 領域の因子分析結果

	1	2	3	4
I 部活動の悩み				
部活動 4 やる気 (意欲) がでない。つまらない	.837	-.005	.015	-.011
部活動 1 充実していない	.724	-.008	-.176	.061
部活動 5 部活の中で達成感を感じていない	.713	-.043	.054	.021
部活動 3 部員 (先輩、後輩、友達) との人間関係に悩んでいる	.277	.215	.145	-.222
II 友人関係の悩み				
友人関係 1 自分は友達が少ないと思う	-.063	.742	-.082	.094
友人関係 3 学校の友達とはあまりうまくいっていないと思う	-.013	.734	-.025	.028
友人関係 4 本当に信頼でき本心を打ち明けられる人がいないと思う	.036	.454	-.017	.098
友人関係 2 自分が友達からどうおもわれているか気になる	.016	.324	.283	-.150
III 学習面の悩み				
学習面 1 授業の進み方がはやすぎると感じる	-.013	-.109	.555	.158
学習面 2 効率の良い勉強の仕方を教えてほしいと思う	-.018	-.096	.530	.034
学習面 5 いくら勉強しても成績についての不安が取れないと感じる	-.051	.061	.445	-.022
部活動 2 部活と勉強の両立に苦労している	-.070	-.042	.439	-.094
教師との関係 3 みんなの前だと自分は勉強質問がしづらいと思う	.058	.125	.390	-.093
学習面 3 正規の授業時間内に課題をこなさきれないと思う	.042	.003	.354	.287
教師との関係 6 苦手な教科の先生には近づきにくいと思う	.053	.112	.282	.117
学習面 4 勉強に対してやる気がなくなっていると感じる	.034	.074	.026	.670
学習面 6 家庭学習をきちんと取り組めていないと思う	-.023	.039	-.033	.544

活と勉強との両立に苦労している」項目や教師との関係3の「みんなの前だと自分は勉強質問がしづらいつと思う」、教師との関係6の「苦手な教科の先生には近づきにくいと思う」が入っているが、当初学習面の領域に入れるか判断に迷ったものであった。また、学習の中でも特に学校での授業に関する内容なので因子分析の結果からこれらの3項目も含めて、第2因子は「学習面の悩み」の因子と命名した。第3因子は、「自分は友達が少ないと思う」などの4項目からなり、そのまま「友人関係の悩み」の因子と命名した。第4因子は、その内容が「勉強に対してやる気がなくなっていると感じる」「家庭学習をきちんと取り組めていないと思う」とあり、「学習姿勢の悩み」と命名した。

以上の検討の結果、抽出された17項目をもって学校内における「部活動をしている男子中学生高校生の悩み」尺度とした。また、因子分析の結果によって得られた3因子を下位尺度として用いることとする。

教師との関係について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。1因子だけを抽出した(Table 2)。

結果として1因子であることが確認された。「教師との関係」の因子と命名した。

心と体の症状について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。1因子だけを抽出した(Table 3)。結果として1因子であることが確認された。「心と体の症状」の因子と命名した。

時間展望について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。1因子だけを抽出した(Table 4)。こちらも結果として1因子であることが確認された。「時間展望」の因子と命名した。

内的整合性による信頼性の検討 学校内における「部活動をしている中学生高校生の悩み」尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。Cronbachの α 係数は、第1因子は、0.732、第2因子は0.640、第3因子は0.623、第4因子は0.563となった。下位尺度の内的整合性は各因子とも高いので尺度の信頼性は高いといえるが、第4因子は下位尺度が2個なのでここでは採用しない。

各因子の下位尺度得点の検討 Table 1の「部活動の悩み」、 「学習面の悩み」、 「友人関係の悩み」の3因子と

Table 2 教師との関係

教師との関係 4	先生とうまくいっていないと思う	.880
教師との関係 1	自分は先生と気軽に話せないと思う	.602
教師との関係 2	成績が下がると先生は冷たくなる気がする	.417
教師との関係 5	先生とは休み時間や放課後に勉強以外の話を聞いてもらいたくないと思う	.303

Table 3 心と体の症状の因子分析結果

心と体 4	何でもないのでいらいらしている	.719
心と体 5	物にあたりたり、他の友達とトラブルになることが多い	.603
心と体 2	頭やおなかが痛いことが多い	.577
心と体 3	自分の体のことで心配と感ずることが多い	.555
心と体 1	最近疲れやすいと感じる	.517
心と体 6	学校に行く気がしない	.440

Table 4 時間展望の因子分析結果

時間展望 1	どの学部学科に進学するか決まっていない	.735
時間展望 3	将来就きたいと考えている職業がはっきりしていない	.627
時間展望 4	将来就きたいと考えている職業について親は賛成していないと思う	.570
時間展望 2	大学に進学したくないと考えている	.361

Table 2の「教師との関係」、Table 3の、「心と体の症状」Table 4の「時間展望」をあわせて6因子について、各因子の項目の得点を単純加算し、項目数で割った。これをそれぞれの下位尺度得点とする。Table 5に中学生・高校生全体と、中学生・高校生の別に各因子の得点の平均値と標準偏差をまとめた。

Table 5は、中学生と高校生の各因子の下位尺度得点の平均値に有意差が有るかどうかがT検定の結果をのせている。Table 4より、「時間展望」にのみ中学生と高校生間に有意な差が見られた ($t(592) = 5.27, p < .001$)。他の「部活動の悩み」、「友人関係の悩み」、「学習面の悩み」、「教師との関係」、「心と体の症状」にお

いては中学生と高校生間に有意な差が見られなかった。

「心と体の症状」を目的変数に、「学習面の悩み」、「友人関係の悩み」、「部活動の悩み」、「教師との関係」を説明変数として重回帰分析を行った。結果をTable 6に示す。「心と体の症状」は、「学習面の悩み」、「友人関係の悩み」、「部活動の悩み」で説明されることがわかった。また、Table 7にあるように、「教師との関係」と「心と体の症状」($r = .223, p < .01$)は有意な相関関係が見られるのに、重回帰分析の結果から、「心と体の症状」に「教師との関係」は影響力を持たなかった。交互作用を調べてみると「教師との関係」*「学習面

Table 5 男子中学生高校生全体と中学生高校生の各因子間の因子得点平均値と標準偏差

	全体 (n=594)		中学生 (n=286)		高校生 (n=308)		t値
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)	
教師との関係	2.844	(.710)	2.628	(1.039)	2.573	(.867)	.757
学習面の悩み	3.224	(.647)	3.262	(.652)	3.189	(.641)	1.366
友人関係の悩み	2.672	(.762)	2.719	(.639)	2.757	(.553)	1.103
部活動の悩み	2.599	(.953)	2.636	(.766)	2.705	(.758)	.697
心と体の症状	2.972	(.824)	2.947	(.821)	2.995	(.827)	.711
時間展望平均	2.570	(.843)	2.749	(.788)	2.392	(.859)	5.268***

*** $p < .001$

Table 6 「心と体の症状」に関連する悩みの重回帰分析の結果

説明変数	β 値 (n=594)	R2
モデル I		
学習面の悩み	.188***	.198
友人関係の悩み	.267***	
部活動の悩み	.180***	
モデル II		
学習面の悩み	.178***	.201
友人関係の悩み	.248***	
部活動の悩み	.174***	
教師との関係	.073 n.s.	
モデル III		
学習面の悩み	.178***	.236
友人関係の悩み	.248***	
部活動の悩み	.174***	
教師との関係	.073 n.s.	
教師との関係 * 学習面の悩み	.052 n.s.	
教師との関係 * 部活動の悩み	.028 n.s.	
教師との関係 * 友人関係の悩み	.121**	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

の悩み」, 「教師との関係」 * 「部活動の悩み」はともに交互作用が見られなかった。しかし, 「教師との関係」 * 「友人関係の悩み」の交互作用は, 有意 ($F(121, 440) = 1.40, p < .01$) であった。

6つの因子間の相関係数は0.2前後の値を示した。中学生・高校生全体では, 有意な相関関係が見られなかったのは, 「学習面の悩み」と「部活動の悩み」, 「学習面の悩み」と「時間展望」, 「心と体の症状」と「時間展望」の3組だけであとはすべて有意な相関関係が見られた。

中学生と高校生を比較すると, 中学生では全体のときの3組に加えて, 3組有意な相関が見られなくなる。それは, 「部活動の悩み」と「教師との関係」, 「部活動の悩み」と「時間展望」, 「教師との関係」と「時間展望」である。逆に, 高校生ではこれら3組が有意な相関関係が見られた。

さらに高校生では, 全体, 中学生ともに有意な相関関係が見られなかった「心と体の症状」と「時間展望」の組 ($r = .122, p < .05$) において, 有意な相関関係がみられた。

「教師との関係」は, 単独では「心と体の症状」に影響を及ぼさないが, 「友人関係の悩み」と結びつくことで「心と体の症状」に影響を及ぼすことが分かった。

「心と体の症状」の平均値を「教師との関係」の高群と低群, 「友人関係の悩み」の高群と低群に分けて表にまとめた。その結果はTable 8である。友人関係の悩みが高い時には, 教師との関係が高くても低くてもあま

り変わらないが, 友人関係の悩みが低い時には, 教師との関係が高い時には友人関係の悩みが高いときと心とからだの症状の平均値はあまり変わらないが, 教師との関係が低い時には, 友人関係の悩みが低い時に心とからだの症状の平均値が下がることが分かった。つまり, 教師との関わりは, 友人関係の悩みと心身症状との関係を調整していることがわかった。ただし, 教師との関わりの“よさ”が調整するのは友人関係の悩みが低いレベルのときであり, 友人関係の悩みが強い場合には調整効果をもたなくなってしまうのである。

4章 考察

A節 中学生の悩みの検討

本研究では, 部活動をしている中学生高校生の学校における悩みを明らかにするために, 調査1で質問項目を抽出し, 調査2で学校における悩みの内容を明らかにしようとした。

「学習面の悩み」として抽出された項目の(授業の進度の速さ), (効率良い学習方法), (成績への不安), (勉強と部活動の両立)等の内容は, 部活動をしている生徒にとって学習の時間の確保が難しいと推察された。

「友人関係の悩み」において, (友達が少ない), (友達とあまりうまくいっていない)等の内容から, 中学生高校生が部活をする中で人間関係が鍛えられ, 悩みを持たないというわけではないことが示された。

「部活動の悩み」は, (充実していない), (やる気が

Table 7 男子中学生高校生の各因子間のPearsonの相関係数($n = 594$)

	教師との関係	学習面の悩み	友人関係の悩み	部活動の悩み	心と体平均	時間展望平均
教師との関係	1					
学習面の悩み	.214**	1				
友人関係の悩み	.329**	.259**	1			
部活動の悩み	.176**	.066	.330**	1		
心と体の症状	.223**	.269**	.376**	.281**	1	
時間展望平均	.223**	.054	.143**	.120**	.066	1

** . $p < .01$

Table 8 心と体の症状の平均値 (教師との関係と友人関係の悩みのH群, L群)

	教師との関係	
	悩みH群	悩みL群
友人関係の悩み	悩みH群 3.682	悩みL群 3.650
	悩みL群 2.936	悩みL群 2.469

出ない)、(達成感を感じていない)という内容の悩みが抽出された。生徒は部活動に参加していても、必ずしも達成感が得られていないことが推察された。このことは、高田ら(1985)が、青年期における学校不適応の一つに「部活動」に起因する不適応が目立ってきていると報告し、吉村(1997)が、「部活動は生徒にとってストレスをもたらす主要な原因の一つでもあり、ストレス症状に直接影響を及ぼす原因は、部活の内容そのものよりも部内の友人関係のあり方」と報告している内容と合致しているといえる。部活動の充実感を得られない原因は、各学校や同じ学校でも部活間によって悩みは変わってくるのが予想される。例えば、選手であるか補欠であるかによって部活における悩みの差があることが想像できるが、全国的な強豪校であれば、補欠にすらなれなくても近隣からの評価によって自尊感情を高めることが出来ると推察される。本研究の対象校は都内の私立男子中学高校であり、きわだった強豪部は存在していない水準の学校である。

大前(1999)の調査報告からは、本研究で得られた6つのうち4つの因子、すなわち「教師との関係」「学業」「部活動」「友人関係」が報告されている。小針(2008)の調査報告からは、本研究で得られた6つの因子のうち4つ、すなわち「将来の進路」「現在の学校での成績」「友達との関係」「先生との関係」が報告されている。本研究で抽出された悩み3因子「学習面の悩み」、「友人関係の悩み」、「部活動の悩み」は学校生活における悩みは不安として妥当と考えられる。しかし「教師との関係」は、大前(1999)や小針(2008)では、悩みとして考えられている。ただ、大前(1999)や小針(2008)は、生徒から悩み質問項目を抽出して質問紙を作成していない。

したがって、中学生高校生から抽出された「教師との関係」が悩みなのかについて検討する。

B節 中高生の悩みと心と体の症状

「学習面の悩み」、「友人関係の悩み」、「部活動の悩み」の悩みに加えて「教師との関係」が「心と体の症状」にどのような関係があるのかについて検討する。Table 6「心と体の症状」に関連する悩みの重回帰分析の結果から、3つの悩みが心と体の症状に正の影響を及ぼしていることが示された。このことから、大前(1999)や小針(2008)の報告通り、これらは心と体へ影響を及ぼす悩みとして考えられる。

中高生の悩みが心とからだの症状を予測したので、中高生の悩みは不適応症状の一手手前の潜在的状態

(1章問題と目的A節)の可能性が高いといえる。

C節 中高生の悩みと教師との関係

3章の結果から、「教師との関係」は、「心と体の症状」を予測しないことが、重回帰分析の結果から示された。すなわち、大前(1999)や小針(2008)が悩みと報告したような「教師との関係」が、中高生の悩みとはなっていないことが分析の結果より示された。当初、教師との関わりは、悩みに含まれないものと判断・解釈したが、教師との関わりは心身症状を予測しなかったので、予測は正しかったと考えられる。

次に、「教師との関係」が中高生の持つ3つの悩みとの間に、何らかの緩衝効果を持つかどうかを考えた。そこで交互作用を調べた。Table 6の結果から、「友人関係の悩み」と「教師との関係」が有意になった。

当初、教師の働きで生徒が悩みを持ったとき調整効果を持つと予想した。しかしTable 8の結果から、調整効果は限定的なものであると考えられる。すなわち、「友人関係の悩み」が高いときは、教師は調整効果を持たないことがわかった。「友人関係の悩み」が強くならなければ教師の関わりが良ければ友人関係の悩みを低める効果はあった。それでは教師はどのような役割を担うべきであろうか。教師は生徒の悩みに対して早期に介入できるような関係を築くこと、具体的には、新学期の時に良好な生徒と教師との関係を築くことで友人との悩みを低める効果が期待できると推察された。

以上の結果から教師は、必ずしもストレスサーではないと考えられる。社会的サポートのよい与え手にもなっていないかもしれない。調整効果は限定的なものである。それでも、友人関係の悩みが弱い場合は調整効果をもち得るということは重要なことかもしれない。ただし、教師との関係の効果は、サンプル教師に依存する部分が多いので異なったサンプルでさらに検証する必要があると考えられる。

D節 今後の課題

本研究では、部活をしている子どもを対象としていること、1つの学校におけるデータであることから、抽出できた悩みがすべての中高生にあてはまるかどうかはさらに今後男女、他の学校を含む多くの中高生において検討する課題があると考えられる。また、教師との関係の効果は調査対象教師に依存する部分が多いと考えられるので、異なったサンプルでさらに検証する必要

がある。さらに、中学生と高校生の差についての分析は出来ていない。今後さらに検討していきたい。

引用文献

- 天野洋子・上田礼子・桜井あや子・安里葉子 (2000). 中学生の対処行動に関する研究—悩みや困ったことのある場合—沖縄県立看護大学紀要, 1, 1-8.
- 尾藤ヨシ子 (2009). 中学生の悩みの特徴と悩むことの意義 日本教育心理学会総会発表論文集 (51), 626.
- 江上園子・角谷詩織・無藤隆 (2003). 小・中学生の抑うつ症状に関する研究：学年別・学校別・および性差による検討 日本教育心理学会総会発表論文集 (45), 230.
- 小針誠 (2008). 中学生はスクールカウンセリングを利用しているのか？—心理主義化する現代日本社会における中学生の悩みとその相談先— 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 25, 26-40.
- 藤井義久 (1997). 現代の学校現場が抱える諸問題—学校ストレスを中心に— 教育心理学研究, 45, 228-237. (Fujii, Y. (1997). Problems troubling classrooms of modern schools—A review of stress—. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 45, 228-237.)
- 古屋健治 1993 「悩み」とはどのいものか 児童心理47(1), 9-16.
- 平林直子・中谷素之 (2007). ストレスマネジメント実験授業が児童の自尊感情・自己効力感および学級満足度に及ぼす影響 カウンセリング研究, 40, 146-157.
- 石橋太加志 (2009). 中学生・高校生の悩みに関する教師の役割について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学) 56, 21-28.
- 岩井寛 (1983). 人はなぜ悩むのか 講談社現代新書
- 岩瀧大樹 (2008). 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究-1 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 17, 53-68.
- 神保信一 1985 生徒指導の立場から 学校保健研究27(1), 19-21.
- 前田英行 2008. ITプロジェクトのメンタルヘルス問題への脳科学からのアプローチ *Journal of Society of Project Management* Vol.10, No.1, 9-14.
- 森和代・堀野緑 (1992). 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410. (Mori, K., & Horino, M. (1992). A study of social support for elementary school children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 40, 402-410.)
- 文部科学省 2012 学校基本調査
- 長尾博 (2002). 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程 発達心理学研究, 13, 295-306. (Nagao, H. (2002). The psychological process of maladjustment, and conflicts in ego development in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 13, 295-306.)
- 中山巖 (編著) (1992). 教育相談の心理ハンドブック 北大路書房
- 小保方晶子・無藤隆 (2006). 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連について：ストレスとコーピングからの検討 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 65-73.
- 小田友子 (2000). 青年期の悩みの主観体験化に関する研究—「悩み体験スケール」の作成を通して— 人間性心理学研究, 188 (2), 117-127.
- 大前泰彦 (1999). 中学生のストレスとコーピング及びストレス反応との関係—実践研究の観点から—和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 9, 1-8.
- 岡田佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての検討—教育心理学研究, 50, 193-203.
- (Okada, Y. (2002). Psychological stress in junior high school students: A model for the occurrence of secondary responses. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 50, 193-203.)
- 岡孝宏・高山巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者及び加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421. (Okayasu, T., & Takayama, I. (2000). Psychological stress of victims and bullies in junior high school. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 410-421.)
- 齊藤ふくみ・木下正江・金田恵・森よし江 (2010). 中学生の悩みとその対処行動及び学習との関連について茨城大学教育学部紀要 (教育科学) 59, 193-203.
- 佐藤有耕・山本誠一・加藤隆勝 (1991). 高校生の悩みと求める援助の特質 筑波大学心理学研究, 13, 141-154.
- 神藤貴昭 (1998). 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究, 46, 442-451. (Shinto, T. (1998). Effects of academic stressors and coping strategies on stress responses, feeling of self-growth and motivation in junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 46, 442-451.)
- 杉田義晴 (2007). 自分らしくしあわせになる『こころの魔法』, ころころ相談室へようこそ はまの出版, pp.233-258.
- 角谷詩織・無藤隆 (2001). 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足度との関わりにおいて—心理学研究, 72, 79-86
- 高田知恵子・丹野義彦・高田利武 (1985). 青年期の自尊感情と部活動に対する認知との関連 群馬大学医療技術短期大学部紀要 6, 29-35.
- 戸ヶ崎泰子 (2006). 社会的スキルと適応 (谷口弘一・福岡政治編 対人関係と適応の心理学—ストレス対処の理論と実際—) 北大路書房 pp.83-95.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 (2000). 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連—学校不適応予防の視点から— カウンセリング研究, 33, 235-248.
- 山下剛利 2003 脳における統合状態の破綻と修復—40~60Hz皮膚電気刺激の効果—電子情報通信学会 信学技報, 39, 59-62.
- 安田貢・遠藤俊郎・下川浩一・布施洋・袴田敦士・伊藤潤二 2008 大学生の運動部に関する回顧調査—高校時代のストレス, サポート, 自己効力感に着目して—山梨大学教育人間科学部紀要, 10, 118-128.
- 安田貢・遠藤俊郎・下川浩一・布施洋・袴田敦士・伊藤潤二 2009 大学生の運動部に関する回顧調査—中学時代のストレス, サポート, 自己効力感に着目して—山梨大学教育実践学研究, 14, 95-105.
- 横島義昭 (1999). 高校における心理教育的援助サービスの実践 教育心理学年報, 39, 38-39.
- 吉村斉 (1997). 学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性— 教育心理学研究, 45, 337-345.